

幽霊ショートストーリー

(阿部会員)

京都で幽霊といえば、誰でも知っていて一番ポピュラーなのが深泥ヶ池の幽霊でしょう。ある雨の日の深夜、通りがかったタクシーが一人の若い女性客を乗せた。暫く走ってその客にしゃべろうと声を掛けたのですが返事がないので振り向いて確認したところ誰もいなかった。という話。念のため止まってドアを開け確認したが本当に誰もいない。よくよく見ると、座っていた場所が濡れていた。怖くなってその場を一目散に逃げた。と、まあこういったストーリーです。

これから話すことは幽霊に遭遇した本人から直接聞いた話です。それはコロナ禍で騒ぎ出した前年の夏も終わりに近づいた夜の九時頃です。自治会の打ち合わせも終わり、三人で妙心寺の北門から入り南門の出口までの丁度真ん中くらいのところの角を曲がったところで遭遇したということです。すれ違った瞬間はふっと何かを感じ、誰かいるのかな、くらいにしか思わなかった、いや見えなかった様です。五〇歩程歩いてから三人のうちの二人が同時に「おい見たか」と声を掛け合ったのです。そして、急に足早になったのです。もう一人は二人が何で急に足早になったか全く分からず、追いついて、「どうしたん」というと、「あんた見てないんか」と何の話か理解できず、話に入り込めず、聞くともなく聞いてみると、白い服、いや白い着物みたいやった、突っ立ってた、女性や、髪長かった、じっとしていた、こんな時間におかしい、とか猛烈な勢いで今瞬時に見たことをしゃべっているんだとやっと理解できたそうです。で、もう一人の人は全く気づかなかったそうです。その夜は遭遇した二人は遅くまで寝付かれなかったそうです。

後日談として、すぐ引返して確認するという気持ちは全く起きなかった。現場から一刻も早く立ち去りたい気持ちの方が勝っていたそうです。

